

抑うつ認知脆弱性が対人行動に及ぼす影響

—適応的な側面とストレス経験に着目して—

野間 紘久¹ 中島健一郎²

(¹広島大学教育学部・²広島大学大学院教育学研究科)

問題

主要な抑うつ理論の1つである抑うつ認知理論(Beck, 1979)では、抑うつ認知的要因の1つとして抑うつスキーマが仮定されている。抑うつスキーマはストレスなどのネガティブなライフイベントによって活性化し、抑うつを生じさせる(Clark & Beck, 1999)。一方で、丹野(2001)は抑うつスキーマには適応的な側面が存在する可能性があるとして述べており、また、黒田(2016)では抑うつスキーマの中間信念である非機能的態度が他者からの肯定的な評価などのポジティブなライフイベントを予測することを示している。

しかし、黒田(2016)ではどのような行動がそれにつながるか、すなわち適応的な対人行動への影響が検討されておらず、またネガティブなライフイベントへの影響も示されていない。それぞれのメカニズムが明らかになることで、抑うつスキーマの持つ意味が明確になり、それが研究の展開やより効果的な臨床的介入へとつながることが期待できる。

そこで本研究では抑うつスキーマが対人行動に与える影響について、ネガティブなライフイベントも含めた検討を行う。その際、認知脆弱性のひとつである、推論の誤りにも着目する。本研究の仮説は「ストレスフルイベントが少なく、誤った推論が成されていない時、抑うつスキーマを持つ者ほど適応的な対人行動をとる」である。

方法

参加者 18歳—49歳までの500名(女性256名)

また、本研究では18歳から49歳までの300名(女性153名)に対して追加調査を行った。

手続き インターネット調査にて、抑うつスキーマ(家接・児玉, 1999)、推論の誤り(丹野, 1998)、ストレスフルイベントの経験頻度(中島ら, 2010)、対人文脈における行動意図(清水ら, 2019)、抑うつ(小嶋ら, 2002)について全て4件法で回答を求めた。

結果と考察

目的変数に対人行動、説明変数に抑うつスキーマ、推論の誤り、ストレスフルイベントを投入した重

回帰分析を行った結果、抑うつスキーマ・推論の誤り・ストレスフルイベントの3要因の交互作用が有意であった。 $(\beta=.305, p<.01)$ 推論の誤りとストレスフルイベントをスライス変数に投入し、単純傾斜の検定を行った結果、推論の誤り低・ストレスフルイベント低群において抑うつスキーマの主効果が有意であり $(\beta=.143, p<.05)$ 、仮説と一致した結果が得られた(Figure 1)。

一方、追加調査のデータについて同様の分析を行った結果、推論の誤り低・ストレスフルイベント高群 $(\beta=.562, p<.01)$ 、そして推論の誤り高・ストレスフルイベント高群 $(\beta=.402, p<.01)$ において抑うつスキーマの主効果が有意であり、仮説とは矛盾した結果であった(Figure 2)。

追加分析として抑うつ尺度と対人行動の相関に着目した結果、追加調査のデータにおいてのみ、有意な相関がみられた $(r=.365, p<.01)$ 。このことから「適応的な対人行動を取りつつ、抑うつも高まっている」という仮説とは異なったプロセスが存在している可能性が考えられる。今後はこのプロセスを検討していくとともに、客観的な指標も含めたより詳細な検討が必要と考えられる。

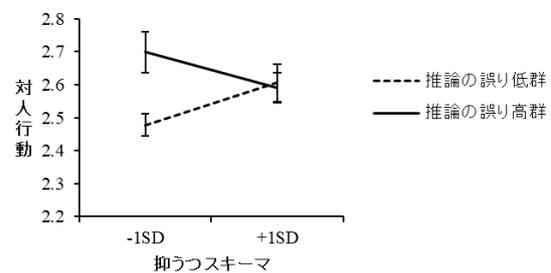


Figure 1 単純傾斜の検定の結果
(図はストレスフルイベント低群条件のもの)

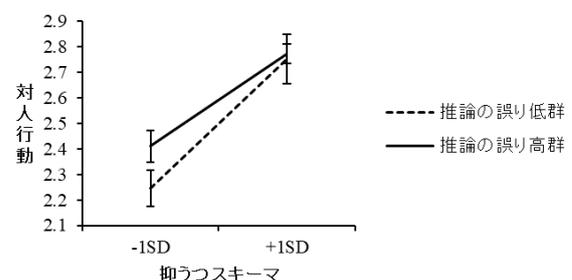


Figure 2 追加調査における単純傾斜の検定結果
(図はストレスフルイベント高群条件のもの)